

加齢の意味についての解釈学的現象学による考察

石田 かおり

A Hermeneutical Phenomenological Study on the Meaning of Aging

Kaori ISHIDA

1. 本研究の動機と目的および方法と、他の加齢研究との差異について

現代社会の美容行為において人々が求める美しさについて反省する上で、欠くことのできないテーマに「抗老化」が存在する。日常的な場面では「抗老化」は「アンチエイジング」と言われることが多く、美容健康産業におけるその市場規模の拡大はめざましい。「抗老化」の市場規模の拡大は景気に左右されることなく順調に進み、美容健康産業における最大規模の市場を形成しつつある。のみならず、医療においても重大な関心を集め、需要と従事者の増大を招いている。こうした事態に対して、筆者は以前から美と健康と若さの結びつきの来歴とその問題点および解決策を模索し、あるべき社会像を描くためにどのような美的価値基準を持つ必要があるのかを研究して来た。このような研究上、現代社会における加齢あるいは老いの意味を明確にしておく必要がある。そこで、本論文では、現代社会における加齢あるいは老いの意味研究の手始めとして、日本社会における加齢あるいは老いの意味について、現象学的解釈学的方法で考察を加えることにする。

現象学的解釈学的方法を用いる理由は次のようなものである。日本社会における加齢あるいは老いの意味を明らかにするためには、現時点の意味だけでなく、現時点の意味に至る来歴を明らかにする必要がある、その際この方法が有

効であると予測されるからだ。さらに、美と健康と若さの結びつきに関する筆者のこれまでの研究で、日本社会における化粧の意味の来歴を明らかにする試みの際に、現象学的解釈学的方法の有効性が確認できたという理由もある(注1)。

なお、本研究に類似すると思われる先行研究として、社会学における諸々の研究成果が挙げられる。それらは一見するときわめて類似する研究であるばかりでなく、本研究を推進する上で大いに参考になるものである。しかし、意味を研究するという点において、また「なぜ」そのような意味を持つに至ったかという点において、哲学的研究方法が「どのように」ではなく「なぜ」という問いに対して有効性が高いことを考えれば、本論文はそれらとは異なる特色を持つものと位置づけることができるのではないだろうか。また、倫理学においても老いをテーマにした研究が見られるが、本論文が美的価値基準を最終目的とするのに対して、倫理学的研究における先行研究で美的価値基準を目的としたものは、筆者が調べた範囲では見つからなかった。むしろ、最終目的である美的価値基準とあるべき社会像は、倫理学の重要な課題であると考えられるので、本研究を新たな倫理学的研究の1つとして位置づける可能性も考えられる。

加齢に関する研究で社会的に認知されている一分野を確立している研究は、現在までのこと

ころ老年学 (Gerontology) が唯一のものである。老年学の内容を見ると、現在までのところでは、医学・生理学・運動科学を中心とした自然科学的研究がほとんどである。老年学は発生の地アメリカが進んでいるが、アメリカにおける研究も日本における研究も分野の点では変わりがない。また、本論文執筆時点ではあるが、老年学の研究と教育のリーダー的存在として知られている日本の研究機関に、東京大学高齢社会総合研究機構と桜美林大学が存在している。東京大学の上記機構の教育プログラムと科目名、シラバス、担当教員を見ると、高齢社会の課題を医療・介護システム、産業、社会システムの3つの柱となる分野で解決法を探るものであることがわかる。この中には倫理学の授業も存在するが、シラバスからもまた担当教員の研究業績からも^(注2)、本論文のように美的価値基準を目的とした研究ではない。また、桜美林大学の受験生向け説明^(注3)を見ると、老年学(含:基礎老化学)、老年心理学、老年医学、老年社会学、老年福祉学をコアとして、リハビリテーション、看護・ケア学、疫学・統計学、政策学なども学ぶということである。こうしたことから、加齢または老いに関する本研究のユニークさが認められるのではないだろうか。

なお、本論文では以後研究テーマを「加齢あるいは老い」ではなく「老い」という表記に統一する。「老い」と表記する理由は、「加齢」という語が登場したのが近年であるため、理解はされるが社会的にまったく定着していないことと、新しい語であるがゆえに本研究に必要な過去の文献には見出されないためである。本論文で「加齢または老い」と表記する内容は過去の文献では「老い」として表現されている。こうしたことが理由である。

2. 日本文化に対する影響に関しての中国文化における老いの意味

日本における老いの意味を調査するに当たって、手始めに中国文化における老いの意味を簡単に見ておく必要があるだろう。中国文化は近世までの日本文化に多大な影響を与えたためだ。とりわけ近世までの世界観と思想を問題にする場合には、その時代の中国文化における世界観と思想を押さえておかねばならない。

中国古典における「老」は、「老成」に代表されるように人間的成長の最高段階を指す。また、現代中国でも「老」は高い価値を持っている。たとえば孔という姓の人物を「孔老」と呼ぶように、年上の親しい知人・友人の姓の末尾に「老」つけて親しみと同時に尊敬を表すことも日常的に行われている。辞書に見る現代中国語の「老」の意味にはおもに次のようなものがある。①年をとっていること。②古くて価値のあること。「老朋友」は古くからの友達の意味。③古いから価値が落ちること。「老脑筋」は古臭い頭の意味。④慣用句「老子英雄儿好汉」は直訳すると「親が英雄なら息子も立派」で、「蛙の子は蛙」という意味。

古代中国の思想家「老子」の「老」にもこのような意味がある。老子は道教の祖として現在も中国のみならず世界的に絶大な支持を得ているが、「老子」は単なる人物名というだけでなく、人はいかに生きるべきかの至高の模範を体現した「人の道の導師」という意味もあるものと考えられる。

道教は中国古代の母系氏族社会で自然発生した原始宗教であるが、その変化の過程で民俗信仰や神話伝説などのさまざまな思想や技術を取り入れてきた。それだけでなく、儒家、墨家、陰陽家、神仙家、医家などの諸学派の修練理論、倫理観念、宗教や信仰なども取り入れた。そのため雑多で膨大なものとなり、全体像を把握し

難い思想になっている。しかし道教の教えは日本の思想や世界観にも大きな影響を与えただけでなく、近世の医療である養生術と分かち難く結びついていた美容にも重大な影響を与えている。

このように道教の用いる方法論は整理し難いほど種々雑多であるが、その目標は終始一貫している。それは、人々を救うことだ。人々を救うことができる人物になるために、自身が長生し仙人になり道と合して神に通ずることである。仙人は不老不死の技術を習得しているため、少年少女のように若々しく美しくいきいきとした容姿をしている。この長生し仙人になるという点が、中国古代からの抗老化（アンチエイジング）術の発生と発展を促したと考えられる。ただし、抗老化の目的は自分自身にあるのではなく、人々を救うことにある点に注目しなければならない。これが今日の抗老化とはまったく方向性の異なる点であるからだ。仙人になるための修行には、健身術、養生術、駐顔術、美容術、房中術などがある。それらは、どのように身体を保養するか、どのように服薬、洗浴、按摩などによって皮膚や容貌を美しくみずみずしくするか、どのように性生活を調整して身体を強健にしかつ幸福や利益を得るかについての方法である。道教とその神仙思想が日本の伝統的な不老長寿追求の方法と思想に与えた影響は無視できないものである。とくに不老長寿のためには世俗的な欲望を棄てて精神性を高め清らかに生きることと、いつまでも若々しく長寿の人は人間的にも優れた人として尊敬の対象になるという2点に注目しなければならない。

また、後に儒教の影響も加わって、孝養を尽くし終生善を行い徳を積んで自己の道徳的品性を修練して行くことで仙人に到達できるという説も登場する。これもまた美容の目的が自分自身の美ではなく忠孝と礼節であるという日本の

伝統的な化粧観の形成に大きな影響を与えた考え方であると考えられる。

3. 日本の伝統的な老人観概説

大雑把に言って、日本の伝統的な老人観には両義性が見られる。1つは若さの喪失という負の評価を伴う面であり、もう1つは長年の経験の蓄積によって得られた独特の知恵という正の評価を伴う面である。天野正子氏の説に従えば(注4)この肯定的に評価されてきた老人の知の有効性には、次のような2つの理由が存在する。①長年にわたる経験のなかで蓄えられた知である。②世俗の秩序に拘束されない自由がある。②は、目の前の利害にとらわれたり、利害に照らして善悪を即座に決めずに、村の歴史の流れを見通し、共生への志を持つことで、常に現在を中心に置いて過去を未来に、未来を過去に投影するという、柔軟な遠近法的性格を持つことをいう。

伝統的に日本では老いの中に再生や若さに通じる生命の連鎖を見出してきた。それは、自分が存在することの基底にはそれ以前の人々の老いと死があるという考えとして現れている。それと同時に老人には一歩先に死去した人たちとの再会と、生まれ変わりの楽しみがあるとされ、老年期は次の生への準備期間とされてきた。そのため、死は恐怖のみで語られるものではなかった。

また、中国と同じく「老」は人物を尊敬する意味と役割上の重責を示していた。「老」は性別を問わず使用された。たとえば次のようなものである。「老師」は中国では「教師・師匠」の意味として通常使われるが、仏教、とくに禅宗で師匠に対してとくに尊敬を込めた呼称として用いられる。江戸幕府の最高職の名称は「大老」と「老中」。大奥の最高職の名称は「老女」である。

身体は老耄になっても記憶はけっして衰えないのが老人であると考えられ、それゆえ老人には古風の伝承の役割もあった。『古事記』成立の伝承のように、天皇や地方に派遣された国司は古老から話を聞き、そのことを政治に生かした。

しかしその一方で、老いると姿が悪くなるだけでなく、性格も僻みになるとされた。このように価値的に正負両面を兼ね備えた両義的の老人観が、伝統的なものである。

4. 平安・鎌倉時代における老いの意味

日本の古代・中世社会において、老人の境界年齢は40歳であった。たとえば『源氏物語』に「四十の賀」と「五十の賀」が登場するが、こうした長寿の祝賀の儀は40歳から始まる。このように、社会から老人として認められるようになると、一定の年齢に達したことを（すなわち一定の年齢まで生き延びたことを）祝う儀式があった。現在でもこうした祝賀の節目の年齢が存在するが、そこにはその年齢まで生きることが長寿であり祝うべきことであるという価値観がある。このことはすなわち、その年齢に達することが誰にでもできたわけではないということの証左にもなっている。平安時代に引き続き鎌倉時代にも40歳から老年とされていたことが『徒然草』から読み取ることができる。今ではまったく耳にしなくなった「初老」という語は、1980年代頃までは40代に差し掛かった人を形容するものであったことが思い出される。

平安時代は老人が身体的に衰えて自立できなくなると、家族や家人による扶養と介護を受けた。始めは担い手が家族や家人だけであったが、やがて律令により老人の扶養が定められることで、社会全体で老人を担うようになった。

一方、貴族社会では健康な老人は生涯現役で、宮廷の地位もそのままであった。女性の場合で

も、老いていったん職を退いても健康ならたびたび宮廷に呼び出されて仕事を申し付けられた。その一方で、年老いた官僚は若い官僚から煙たがられていた。

『徒然草』第七段に老いについての記述が見られる^(注5)。ここにはいつまでも長生きして老醜を曝すのは恥であるという考え方が見られる。

いつまでも生き続けることができない世に生き長らえて、己が醜い姿になるのを待ち迎えたところで、それが何になるというのか。長生きをすればするほど恥も多くなる。長生きしても40歳足らずで死ぬのが無難であろう。40歳を過ぎると己の姿形を恥じる気もなくなり、人との付き合いを楽しみにし、老年になると子や孫を可愛がり、子や孫が立身出世する末を見届けられるほどの寿命が欲しいと願い、ひたすら現世の名誉や利益といった欲をむさぼる気持ちばかりが強くなり、風流を感じる心を失って行くのは、なんとも情けないことだ。

現代ではこれとは反対に、兼好が老年の情けない生き様として描いた生き方が至極一般的なものであり、肯定的に評価されている。

5. 翁に見られる古代の老い

古代・中世社会の老いの意味を考える上で無視することができないのが「翁」という存在である。ここでは民俗学の研究成果を援用しながら見てみよう。

翁は老いの持つ属性の中でも、異質性の際立つ部分をとくに意識した言葉であるとされる。翁は貴族の常識外にあり、身分の低い存在で、異能者、あるいは親しみやすい好奇心を起こさせる道化的存在など、いわばこの世離れした老人を表現した語である。翁は老人の中でもとり

わけ老熟、老成、老練、老巧などの正の価値評価を持つ側面を表したものである。

具体的には翁は地主神を表すと言われる。新築の能楽堂での初めての上演時や新年を迎える演能には必ず翁が登場するが、翁が舞うことで安泰と繁栄を祈るのも、翁の能力に畏敬の念を抱いていたからである。

6. 古代・中世の女性の老い

ただし、翁になれたのは男性のみであることに注目する必要がある。男性が老いたときに獲得した価値は社会的に肯定的な評価を受けたのに対して、女性はそうではなかったことが推測される。

実際、主人や夫を持たない女性の従者や病人、とりわけそれが老人の病人は、貴族層でも家屋敷の外に遺棄され、死に至ることが多かった。また、翁の対語に「嫗」という語があるが、嫗は老女一般や敬称ではなく、下層の老女や異質で理解を超えた領域にある老女のことを指していた。これらのことから、男女で老いの位置づけが大きく異なっていたことがわかる。

ちなみに、三途の川の畔に待ち構えていて三途の川を渡ってあの世に行こうとする死者の衣類を有無を言わず奪う脱衣婆（だつえば）や、鬼婆、山姥、山婆、山女など、昔話の鬼はすべて女性である。たとえば「安達が原の鬼婆」、「鍛冶屋の婆」、「天邪鬼と瓜子姫」などの物語がその典型的な例である。また、中世には老母が息子を食う話が流布したように、女性の老いに対する否定的評価が顕著である。

こうした物語が登場した背景には、古代と中世の社会における女性の位置づけとそれに由来する老いの意味が存在するものと考えられる。それは次のようにまとめられる。①母性尊重論と母性罪悪論の相克。もとは仏道修行の邪魔になる女性に対する欲望を排するために発生した

と言われるが、やがて一人前の男性になるために美しい女性に対する愛欲や息子に対する母親の愛着が否定されるようになったものと考えられる。そこで否定された女性の情念が鬼に形象化されたものである。②女性を排除した権力構造の普及。平安時代の貴族社会は母系社会であった。やがて平安時代末に台頭した武士階級が中世には政治の実権を握るようになった。実質的な支配階級になった武家は家父長制をとっていたが、社会構造とそれに伴う価値観はすぐに切り替わるわけではない。そのため、武士階級の家父長制を普及させるために、このような女性像が登場したものと考えられる。

7. 江戸時代の老い

江戸時代の女性の老いに関しては、当時の女性は男性よりはるかに寿命が短かったのであまり記述が見られない。ちなみに、女性が男性より長生きであることが当然になったのは第二次世界大戦後のことである。女性が男性より寿命が短かった理由は、身体的にも社会的にも男性以上に厳しい条件に置かれていたからだと考えられている。具体的には出産の危険と、民衆の生活を律していた儒教道徳や浄土信仰に基づく女性観である。その女性観とは、一言で言えば男尊女卑と言われるもので、家族制度や身分制度の点で男性以上に厳しい縛りを受けていた。

江戸時代女性の年齢区分は次のようなものである。

- ①年増・・・娘盛りを過ぎた20歳前後
- ②中年増・・・20～30歳
- ③大年増・・・30歳過ぎ
- ④年寄り・・・年増の次

「年寄り」や「年増」という名称は、敬意を持って接する対象で正の評価を持つ語であったこと

は、本稿2で見た通りである。また、年増は人生経験を積んだことが外面にも表れた魅力的な女性ととらえられていて、若いというだけで価値が高い社会ではなかった。こうしたことから「年増」は、現代人の感覚からすると失礼な呼称に見えるかもしれないが、その反対だった。ボーヴォワールが「女性の若さの喪失を男性より無残で厭わしいものと位置づけるのは洋の東西を問わない」^(注6)と言っているが、江戸時代にはこの表現がそのままあてはまるわけではなかった。

一方、男性の老いはどのようにとらえられていたのだろうか。井原西鶴に見られる江戸商人の人生観は次の2つの作品に明確に描かれている。まず、『世間胸算用』では次のようなものである^(注7)。

世の中、ありあまるほどお金があること以上にめでたいことはない。そうなるには、25歳の若い盛りから油断の無いよう生きて、35歳の男盛りに稼いで、50歳の分別盛りには家業の基礎を固めて一家繁栄の道を開き、家督を長男に譲り渡し、60歳にならぬうちに楽隠居(家業にまったく関与しない隠居)をして、真剣な信仰心を持たなくとも寺院巡りの旅を楽しんで、欲に従って生きることだ。死んでしまえば大金持ちでも経帷子一つだけで、そのほかは皆浮世に置いて行かねばならないのだから。

次に、『日本永代蔵』には次のような人生が描かれている^(注8)。

人は13歳までは礼儀も知識も身を立つ術も持たないので、14・15歳までは親の指図を受けて育つ。その後自力で自分自身と自分の家の生計を立て、45歳までに余生を

悠々と送ることのできる家の基礎を固めてから遊樂を極める。

これらの例から、人生は「かせぎ」と「遊樂」という二つのライフステージで成り立っていると考えられていたことがわかる。ちなみに、隠居は中世以降の武士階級に始まり江戸時代には商人の間にも普及した。また男性だけでなく女性も、一定の年齢になると家庭を切り盛りする役割を次の世代に譲って事実上の隠居生活に入った。

隠居は社会的に認められた制度で、家父長権と財産処分権を後継者に譲り、代わりに老人扶養を保障させるものである。したがって、隠居制度は個人の自己実現の自由を社会的に保障する制度ということができる。成長過程や社会上あるいは家庭上の役割がある間は個人的な欲望を抑えて社会的役割を果たすことに専念しなければならないが、こうした務めを卒業したことを社会的に宣言することで、初めて個人的な自己実現に生きることができる。家督を譲ることは社会上、家庭上の責務を手放すことであり、それはすなわち自由の身になることであった。

落語に見られる隠居は近世以降の隠居の社会的評価を反映している。物知りであり、趣味に生きる人物で、顔が広く、困ったときの相談相手や人間関係の調整役(たとえば喧嘩の仲裁仲人など)になることができ、町内で尊敬されているという存在である。1969年から放送されている人気テレビ時代劇「水戸黄門」の主人公にもこうした隠居像が見られる。番組内では「ご隠居」と敬称で呼ばれ、初対面の旅人であるにもかかわらず隠居というだけで旅先で敬意ある対応を受けている。また、旅三昧は家業のある間は無理で、隠居でないとは不可能なことであった。

江戸時代の作品にはよく「分」という考え方

が登場する。人生の各時期にそれぞれの「分」があるとされ、老人には「老いの分」が社会的に規定されていたと考えられる。

ちなみに、こうした江戸時代の人生観に似ているのが、2007～2008年にベストセラーになった五木寛之氏の『林住期』の元になっている「四住期」の人生観である。参考のために五木氏の解説に従って見ておこう^(注9)。「四住期」は古代インドのバラモン教の『マヌ法典』に登場するもので、人生を次のような4つの段階に分けた人生観である(表1)。

五木氏の『林住期』は社会的・家庭的役割が一段落した世代に向けて、「いまこそ自分のために生きる時間だ」と心理的支援を送ることを目的として書かれている。豊かなシニアライフを描き、自己実現が自由にできる時期は退職後であると考え、働き詰めの現代日本の中高年が自分のために生きることへの応援歌である。出版された年は「団塊の世代」と呼ばれる人口上の大人数を擁する世代が定年退職を迎える年であった。

ここで先述の「分」の思想について説明を加えよう。現代でも「分相応」、「分をわきまえる」、「分際」などの語が残っているが、これらに見られる「分」である。身分と無関係ではないが同一ではない。社会や人間関係における己の果たすべき役割のことである。近世以降の日本は

「分」をわきまえ「分」を果たすことが社会生活でもっとも重視され、教育もここに重点を置いてきた。人生の各段階にそれぞれ「分」がある。したがって、年老いたからといって不要な者、厄介者にはならない。

「老いの分」は3つあった。①文化の伝承、②若年者の教育、③自分自身の人生を歩むことである。「分」があるからこそ老人は尊敬される。「分」があるからこそ老年期の生き方に自由がある。若いうちは隠居を楽しみにしてその年代の分を果たすことに励む。そして老年を迎えたとき、「老いの分」を実現するのだが、「老いの分」を果たすことができるためには養生が重要になる。せっかくの老後の時間も健康でなければしたいこともできないからだ。それゆえ養生が流行し、貝原益軒の『養生訓』に代表されるような養生の書物が数多く刊行され、読まれた。

養生術は道教に起源を求めることができる。江戸時代の医療思想の専門家である立川昭二氏によると^(注10)、江戸時代の養生思想の背景には現代とは異なる健康観が存在する。現代では(正確には明治以後は)「元気」と「健康」は峻別されるものであり、「元気」の反対語は「病気」である。しかし江戸時代は元気と健康を二項対立的なものとしてとらえず、同一物の異なる様相であるにとらえていた。どちらの語も「気」がつくように気の様態を表し、気が元の状態にあるのが元気で、気が病んだ状態にあるのが病気である。元気と病気は同一平面状にあり、峻

名 称	年 齢	ヴェーダにおける意味	現代生活上の解釈
学生期(がくしょうき)	10代	ヴェーダを学ぶためバラモンの師匠に就く時期	学ぶことを中心とした成長期
家住期(かじゅうき)	20～40代	職業に就き一家を養う時期	家庭と社会の責任を果たすことが中心の時期
林住期(りんじゅうき)	50代	財産を捨てて林に住む時期	林に分け入り自己を見つめる時期
遊行期(ゆぎょうき)	60代以上	解脱を図るために放浪する時期	真理を求めて放浪する時期

表1 四住期一覧

別されない。元気と病気の間には広いグレーゾーンが存在して、その時々で元気と病気の2極の間を揺らいでいるのが人間の健康状態であるという認識だ。

ちなみに、「健康」は明治維新によって急速に国民的に普及した概念である。健康という語は富国強兵に象徴される近代国家形成のために、その土台となる国民作りとして登場した。それゆえ、健康を純粋に追求すると、太平洋戦時下のように個人の自由や尊厳がない「すべては国家のため」という社会になる^(注11)。近代国家によって健康は国民の義務であるばかりでなく、同時に個人の道徳的なものとして位置づけられた。健康であることは道徳的であり、不健康であることは不道徳である。伝染病が出た家は消毒され、警察によって家族全員が捕らえられ隔離されたことが象徴的である。「元気」を求めるための「養生」という健康観は、隠居後の個人の生の充実が目的である。それに対して健康を目的とした衛生は、国家社会の役に立つ人間作りというように最高目的が国家であるため、養生とは正反対の価値観である。江戸時代の隠居は個人の生の充実が社会的に認められている点で、近代以前であるにもかかわらず、近代以上に個人主義的といえることができる。

8. 近代化と老いの価値

「健康」に代表される近代国家型の価値観は、国家社会に役立つ人間づくりである。それはすなわち働くことのできる人間であるために、若さと健康が結びついた。それと同時に、個人の身体的価値の高さという点で健康と美は一致するので、美の基準も若さと健康に結びつく結果になり、若さと健康と美の一体化が始まった^(注12)。近代化は若さの価値の台頭を招き、それと同時に老いの価値を喪失させたといえることができる。

明治20年代には「青年」という社会カテゴリーが初めて登場した。1880（明治13）年に基督教青年会が young men の訳として使用したのが「青年」という語の初めての使用である。徳富蘇峰が結成した民友社が『国民之友』や『国民新聞』を発行し、青年は新時代を切り開く存在と位置づけられ、青年の大敵は老人だとされた。青年はやがて壮士になり、壮士はやがて老人になるという、年代別のカテゴリーが確立した。そして、老人は現役世代の終焉を意味するようになった。

国家主導の日本の近代化は、土着の思想や文化の中に近代化の道を探ろうとはせず、それらを解体していく方向で産業化と集権化を達成した。そのため土地ごとの暮らしに根ざした老人の知は古臭く遅れたものとして周辺に追いやられた。こうして近代化に適応できず、居場所を失っていく社会的弱者としての老人像が生み出されて行った。

その一方で、ビジネスや政治、学問、芸術など、あらゆる領域で社会的強者としての老人層が登場し、長老支配構造の基盤を作って行くことにもなった。

さらに1872（明治5）年の学制の制定で、画一的な時間が導入された。学校はすべてが1つの時計に従って進行し、同じ成果を得るのに必要な時間は短いほどよいというように、時間にコスト観念が発生し、時間の有効活用感覚が根付くようになった。こうして自然のリズムに沿って生活していた老人とは異なる時間感覚を持つ子どもたちが出現するようになった。その結果老人と子どもとの距離が次第に広がり、隔絶にまで至った。これが老人の価値をますます下げる結果になった。

こうした子供や青年と老人の格差が決定的に広がったのは、高度経済成長期のことである。1961年来日した若きアメリカ人ダグラス・ラ

ミスは、次のようなことを書き残している (注13)。

その時は年寄りには住みよい国のように思われた。若さを賛美し、老年は恥とみる国から来ると、日本は際立って異なっていると思ったのだ。(略) 私がとくに強い印象を受けたのは、美意識の違いであった。私が育った米国では、人間美という観念はセクシュアリティ (性的能力) と結びついていて、つまり、美しいというのは若々しいことを意味したのだ。

1961年は高度経済成長期が始まった年である。経済成長によってすべてを経済的尺度で計る効率至上主義という近代的価値の支配が決定的になったが、その直前の日本の姿がここに描かれている。この文章の背景にはアメリカ社会において支配的な価値基準が存在する。天野正子氏がその価値基準を次のようにまとめている (注14)。

- ①性関係における数量的な「業績」を若さの尺度とし、セクシー (性的魅力があること) はよいことであるという美的価値が重視されている。
- ②衣食住を中心としたライフスタイルの機能主義、合理主義の徹底化。
- ③若者中心で若さを過剰に謳歌する。こうした社会においては、人生で目指す先は豊かな経験を持つことではなく、いつまでも若々しさを保つことになるのは当然のことである。

こうしたアメリカの影響を戦後強く受けてきた日本社会だが、若さと健康と美の結びつきを決定的にしたものは、1980年代の「ボディコンシャス」(body conscious) の概念の世界的な普及の波をかぶったことである。このときに「体型は自己責任」という意識が日本にも定着した。体型は、自己責任を果たしているか否かは誰にとっても一目瞭然である。このことがダイエットやプチ整形ブーム、さらに加齢による変化は

自然現象ではなく「衰え」だととらえて問題視し、問題を解決するためあるいは予防するために抗老化が重要であるという考えが支配的な社会になった。こうした近代以降の美と健康と若さの結びつきの来歴と、その問題点、および解決策については、さきほども述べたように拙著『化粧と人間』に詳述したためここでは立ち入って論じない。

9. 現在の老人論

日本が高齢社会になってかなりの年月が経ち、高齢期の過ごし方は数多く論じられてきた。ここ数年の傾向として、高齢になってからいかに生きるべきかについて、当の高齢者や近く高齢者の仲間入りをする人物が著した本が続々と出版され、その中からベストセラーが相次いで生まれている。たとえば前述の五木寛之氏の『林住期』もその1つである。そのほかに、上野千鶴子氏の『おひとりさまの老後』、中澤まゆみ氏と小西輝子氏の共著『おひとりさまの「法律」』、松原惇子氏の『「ひとりの老後」はこわくない』などがある。この3冊は老年期の (とくに女性の) 一人暮らしをどのように遂行すれば不安もなく楽しいものになるか、その方法を具体的に記しているが、こうした内容の書物は現在も続々と刊行中である。また、「文藝春秋」は昨年から今年にかけての冬にこうしたテーマで2度の特別増刊号を出している (注15)。これらを読むと、身体自由度が減じた状態で一人暮らしをするにはどうすればよいかという実用的なものから、高齢者として生きるに当たっての心構えといった精神論まで、実に雑多な内容である。元気な高齢者が多いこともあり、積極的で楽天的な論調が目立つ。ハウツー本として使うことのできる実用本位のものを除いてのことだが、こうした本に共通して見られる点が存在する。それを整理すると次のようになる。

- ①老いを否定したり老いから逃げたり目を背けることはせず、老いを受け入れる（これは高齢者として生きる必要条件である）
- ②高齢になって初めて得た知見を披瀝（これから高齢者になる人への配慮の面と同世代の共感を呼ぶ面がある）
- ③高齢者と言っても生き方は人それぞれで個人により事情が違うので、「高齢者」や「老人」と一括してとらえることはできないし、とらえるべきでない
- ④年齢だけで線引きをするエイジズム（年齢差別）はすべきでない
- ⑤自立できる限り自立し、小さなことでも自分でできることは自分でする
- ⑥物と心の整理の必要性と重要性

黒井千次氏は老人論を進める上で重要な注意点を明記している^(注16)。その趣旨は次のようなものである。老年は他から切り離されてそこだけ孤立した時間ではなく、それまで生きてきた結果として人の前に徐々に姿を現すものなので、老年だけを取り出して議論しても生きてきた議論にはならない。老いるということは、どこかに到達することではなく、延々と老い続けることであり、老い続けるとは生き続けることに他ならない。

たしかに、人は生まれてから死ぬまで日々加齢の生涯であるのだから、「老い」は「生きる」と同義としてとらえるべきであろう。従って、老いのあり方を考えることはすなわち生のありかたを考えることである。今後の研究の方向性としても、意義のある指摘だと考えられる。

最後に、今後の社会のあり方と美を含めた価値の基準を考える上で、不可欠かつきわめて重

要な点を記しておきたい。

美と健康と若さの結びつきに関する研究の成果から、またそれと同時に筆者自身の個人的生活体験から得た知見として、近現代社会の構成原理に存する合理主義に由来する問題をこれ以上継続させないことが何より重要であると考えている。その問題とは、社会の構成員である個人が自立性と有用性を備えたものとして想定されている点にある。現実には人生の半分近くは、自立して生きることも、社会の役に立つという意味での有用性も持ち得ないのが実情だ。しかし、これらの条件を満たさない人間は「社会のお荷物」とされ、存在価値が劣るものあるいはないものと位置づけられてしまう。そうではなく、自立と有用性を持たない状態も人間の自然な存在様態であると位置づける社会の構造原理を、これからの社会は基盤に据えて行かねばならない。長沼行太郎氏の『嫌老社会』を引用して本論文を終えたい^(注17)。

(略) ポジティブな嫌老思想、日本で言えばPPKの思想^(注18)は、(略)人間を「自立性」「社会的有用性」で定義しているので、ひとに依存しなければ生きられない無用な老人をなぜ敬わねばならないのか、なぜ庇護しなければならぬのか、という問いに対しては、答えられない。

ラスコーニコフの回答を否定するのであれば、有益・無益・有害を問わず、ひとの生命を無条件に肯定する論理を編み出すしかない（これには社会的コストがかかる、それを覚悟・承認するだけの社会的な論理がいる。）

(略) 近代社会の壮年男性をモデルにした「自立」「自己決定」の概念と、近代の人権

概念（生命・財産・思想信条）の見直し、依存・関係性を組み込んだ新しい「自立」の思想が必要と思われる。

注

- 1 拙著『化粧と人間』、法政大学出版局、2009年、序章と第1章を参照。さらに詳細は、本書の基になった筆者の学位論文「化粧に見られる美的価値の問題と解決策としての化粧教育」（2007年3月文化女子大学大学院被服環境学研究科より博士号授与）の当該箇所を参照されたい。
- 2 清水哲郎氏（東京大学教授で本文に記した機構の担当教員）の諸論文および学会発表を参照。また、筆者と同じフッサール現象学が専門の榊原哲也氏が「ケアの現象学」という科目を担当しているが、鷺田清一氏（大阪大学総長、国内では現象学から臨床哲学を切り開いた先駆者）の臨床哲学に類するもので、いずれも美的価値を問題にしているわけではない。
- 3 桜美林大学ホームページ国際学研究科老年学専攻博士前期課程・博士後期課程 <http://www.obirin.ac.jp/ri/ronen/> 2009年8月7日参照。ここでは「日本初 老年学の教育・研究」と銘打っている。
- 4 天野正子『老いへのまなざし』平凡社ライブラリー、2006年
- 5 吉田兼好『徒然草』第七段、『日本古典文学大系30 方丈記 徒然草』、西尾實校注、岩波書店、昭和1957年、94～95ページ。現代語訳は筆者による。
- 6 シモーヌ・ド・ボーヴォワール『老い』上・下、朝吹三吉訳、人文書院、1972年
- 7 井原西鶴、『世間胸算用』巻二、『日本古典文学大系48 西鶴集下』、野間光辰校注、岩波書店、昭和1976年、221ページ。現代語訳は筆者による。
- 8 井原西鶴、『日本永代蔵』巻四、同上書、116～117ページ。現代語訳は筆者による。
- 9 五木寛之『林住期』、幻冬舎、2007年。
- 10 立川昭二『江戸 老いの文化』、筑摩書房、1996年と立川昭二『病と人間の文化史』、新潮社、1984年を参照。
- 11 次の諸文献を参照。石田かおり『化粧と人間』、法政大学出版局、2009年、第2章。新村拓『健康の社会史』、法政大学出版局、2006年。鹿野政直『健康観にみる近代』朝日新聞社、2001年。三浦雅士『身体の零度』、講談社、1994年。上杉正幸『健康不安の社会学』、世界思想社、2000年。野村和夫、北澤一利、田中聡、高岡博之、柄本三代子『健康ブームを読み解く』、青弓社、2003年。
- 12 石田かおり『化粧と人間』、法政大学出版局、2009年、第2章を参照。
- 13 ダグラス・ラミス「若者が年をとるとのこと」、伊東光晴ほか編『老いの人類史』、岩波書店、1986年、73ページ。ラミスは1961年に日本に移住し、政治学者として活動中。
- 14 天野正子『老いへのまなざし』平凡社ライブラリー、2006年。
- 15 上野千鶴子編『おひとりさまマガジン』、文藝春秋、2008年、12月の臨時増刊号と、『アンチエイジング読本』、文藝春秋 SPECIAL 冬季増刊号、2009年、1月1日発行を参照。
- 16 黒井千次『老いるということ』、講談社、2006年、216～227ページ。
- 17 長沼幸太郎『嫌老社会』、ソフトバンク、2006年、157～159ページ。
- 18 （これは長沼氏でなく筆者による注である）PPKとは「ピンピンコロリ」のローマ字頭文字からの造語で、元気で長生きし病むことなくコロリと死ぬことを理想の老いと死とす

る考え方を表現した標語。1983年日本体育学会で「PPK 体操」と称して長野県出身の北沢豊治氏が考案した健康長寿体操を発表したのが始まりで、長野県が奨励したことでPPKという語が普及した。

参考文献

天田城介「〈古い〉の倫理学」、『倫理学年報第57集』、日本倫理学会、2008年

石川由紀『60歳からの幸せの条件』、情報センター出版局、2004年

上野千鶴子『おひとりさまの老後』、法研、2007年

E.H. エリクソン、J.M. エリクソン『老年期』、朝長正徳、朝長梨枝子訳、みすず書房、1990
内館牧子『エイジハラスメント』、幻冬舎、2008年

NHK スペシャル取材班、佐々木とく子編『「愛」なき国』、阪急コミュニケーションズ、2008年

大町公「戦後日本の老いと介護」、『倫理学年報第57集』、日本倫理学会、2008年

岡田信子『たった一人の老い支度 実践編』、新潮社、2002年

木村順二「隠遁と老い」、『倫理学年報第57集』、日本倫理学会、2008年

栗原道子『あなたは「ひとり」で最期まで生きられますか?』、講談社、2008年

黒住真『「老い」について』、『倫理学年報第57集』、日本倫理学会、2008年

坂出祥伸責任編集『「道教」の大事典』、新人物往来社、1994年

佐藤昭治「自立論：模索するアイデンティティ～成熟世代の変革的主体形成～」、一橋大学大学院社会科学研究科博士論文、2004年

柴田博『8割以上の老人は自立している』、ビジネス社、2002年

柴田博『まちがいだらけの老人像』、川島書店、1985年

柴田博、長田久雄、杉澤秀樹編『老年学要論』、建帛社、2007年

渋谷望・空閑厚樹編集『エイジングと公共性』、コロナ社、2002年。

ジョン・W・ローウェ、ロバート・L・カーン『年齢の嘘』、関根一彦訳、日経BP、2000年

曾野綾子『晩年の美学を求めて』朝日新聞社、2006年

野原すみれ&虹の仲間『老いじたく覚書き』、晩聲社、2004年

中澤まゆみ、小西輝子『おひとりさまの「法律」』、法研、2008年

萩原朔太郎「老年と人生」、『萩原朔太郎全集』、筑摩書房、1976年

福井康順、山崎宏、木村英一、酒井忠夫『道教1 道教とは何か』、平河出版社、1993年

服藤早苗『平安朝に老いを学ぶ』朝日選書682、朝日新聞社、2001年

ベティ・フリーダン『老いの泉』上・下、山本博子、春澤恵美子訳、西村書店、1995年

ヘルマン・ヘッセ『老年の価値』、岡田朝雄訳、朝日出版社、2008年

松井富美男「日本人の老い観—老い文化の底流を求めて—」、広島大学大学院文学研究科論集第66巻、2006年

松原惇子『「ひとりの老後」はこわくない』、海竜社、2007年

山田利明、田中文雄『道教の歴史と文化』、雄山閣出版、1998年

横尾忠則『隠居宣言』、平凡社、2008年

吉本隆明『老いの超え方』、朝日新聞社、2009年

財団法人ダイヤ高齢社会研究財団の「社会老年学文献データベース」<http://www.dia.or.jp/dial/>

日本応用老年学会ホームページ <http://www.sag-j.org/>

東京大学高齢社会総合研究機構ホームページ
<http://www.iog-u-tokyo.ac.jp/>

海外（とくにアメリカ）の老年学についての各種ホームページ